溜池通信 vol.775

Biweekly Newsletter

October 20th 2023

双日総合研究所 吉崎達彦

Contents ************************************	******
特集:経済から見た「グローバルサウス」研究	1p
<海外報道ウォッチ>	
イスラエルとパレスチナをめぐる最新情勢	7p
<from editor="" the=""> 10月の決戦</from>	9p
**************************	******

# 特集:経済から見た「グローバルサウス」研究

本誌 9月22 日号に続き、「グローバルサウス」を取り上げてみたいと思います。外交の世界において「適切な言葉ではない」との指摘もあり、なるほどそれも一理ある。何しろ南にある国ばかりではないし、先進国より豊かな国も含んでいる。とはいえ、新興国の中には「アンチ先進国」の勢力が存在し、それがウクライナ戦争後に「可視化」され、「北でも東でもない南の国々」というナラティブが誕生したことは否定できません。

他方、経済面から考えてみると、近年の新興国に不満が募っていたのは疑いのないところ。そっちの面から「グローバルサウス」を論じるのは、これは本誌の役どころでありましょう。ということで、今月発表のWEOを手掛かりにこの問題を考えてみました。

## ●「グローバルサウス」なんて存在しない?

今年も残り少なくなってきて、だんだん気になってきたのが「今年の流行語」である。 大賞はズバリ<u>「アレ」</u>(©阪神タイガース・岡田彰布監督)で決まりだと思うけれども、 それ以外にも<u>「処理水」「インボイス」「性加害」</u>などがすぐに思い浮かぶ。筆者は見て いないけれども、<u>「Vivant」</u>(別班) も当確であろう。

そして国際関係では<u>「グローバルサウス」</u>である。何しろこの言葉、去年まではほとんど使われていなかった。それを「流行語」に持ち上げた張本人は、インド外交と日本外交であろう。つまり **G7 と G20 の議長国が今年はこの言葉を「使い倒した」**。

インドは年初にリモート方式で「グローバルサウスの声サミット」を開催し、「皆さんの声を G20 に届けます」とぶち上げた。そして日本は、「グローバルサウスとの対話」を課題に掲げ、広島サミットにはインド、インドネシア、ベトナムなどを招待した。さらに中国による独自の動き(例えば今週の「一帯一路」フォーラム)もあり、今年の外交は「誰がグローバルサウスの声を代表するか」という競争の様相を呈していたと思う。

#### ○2023年の外交を振り返る(青=先進国、赤=新興国、紫=両方)

- 1月 グローバルサウスの声サミット(リモート、1/12-13)\*議長国インド
- 3月 日韓首脳会談(東京、3/16)→岸田首相がキーウ訪問
- 5月 **G7 首脳会議、OUAD** (広島、5/19-21)
- 7月 **上海協力機構会議** (リモート、7/4) \*議長国インド **NATO 首脳会議** (リトアニア・ビリニュス、7/11-12)
- 8月 **日米韓首脳会談** (米・キャンプデービッド、8/18) **BRICS 首脳会議** (南ア・ヨハネスブルグ、8/22-24) →メンバー拡大
- 9月 **ASEAN 関連会議** (インドネシア・ジャカルタ、9/4-7) 東方経済フォーラム (露・ウラジオストック、9/10-13) →ロ朝首脳会談 (9/13) **G20 首脳会議** (印・ニューデリー、9/9-10)
- 10月 ハマスのイスラエル攻撃 「一帯一路」フォーラム (中・北京、10/17-18) →プーチン訪中
- 11月 **APEC 首脳会談** (米・サンフランシスコ) →米中首脳会談? COP28 (UAE・ドバイ、11/30-12/12)
- 12月 日中韓首脳会談(韓・ソウル、年末?)

今年の外交日程を、上記のように整理してみた。先進国側(青)は  $G7\rightarrow NATO\rightarrow H$ 米韓という順序で協調を図り、「中ロ側」(赤)は上海協力機構会議 $\rightarrow BRICS$  首脳会議 $\rightarrow$ 「一帯一路」フォーラムという形で存在感を示してきた。 さらに BRICS 首脳会議では、新たに 6 か国を新メンバーとすることを決めている。ただしその決定のビミョーさについては、本誌 9月 22 日号「インド外交とグローバルサウスの論理」で触れたばかりである。

それとは別に、東アジアサミットや G20、APEC などは先進国と新興国がともに参加する場なので、これらは両方(紫)ということになる。G20 で議長国を務め、「我こそはグローバルサウスの盟主なり」と振舞っていたインドは、残念ながら来月の APEC のメンバー国ではない。

などと考えていたら、今週発売のPHP『Voice』11月号では、「グローバルサウスという 幻想」という特集を掲げている。慌てて読んでみると、田中明彦教授の巻頭論文が<u>「グローバルサウス」という言葉は適切ではない</u>、と主張している。以下の指摘は、なるほど「ごもっとも」である。

- \* シンガポールやサウジなど産油国の一人当たり GDP は先進国と同水準である。これら 高所得国と南スーダンなど 1000 ドル未満の国々を同一カテゴリーで扱って良いのか。
- \* 地域として、かならずしも「サウス」に位置しているわけではない。
- \* 欧米や日本がインドを重視するのは地政学的に重要であるからであり、グローバルサウスの代表であるからではない。新興国や途上国はインドの言うとおりに動くわけで はないし、インドも彼らの総意を受けて行動するわけでもない。
- \* ゆえに「新興国・途上国」「インド太平洋」「内陸アジア」「中南米」など、常識的 な用語を使えばいいのではないか。

#### ●なぜグローバルサウスは「可視化」されたのか

他方、田中教授のような「正論」を超えて、「グローバルサウス」という言葉が既に定着しつつある現実も、素直に認めなければならないだろう。

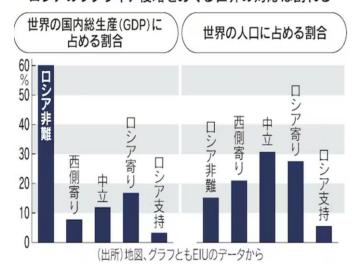
おそらく「グローバルサウス」という言葉はナラティブ(説話能力)であって、実態があるかどうかはさほど重要ではない。呼ばれた当人たちが、「自分たちはグローバルサウスである」と認識すれば、それは独り歩きし始めるのである。

それでは、なぜグローバルサウスが「可視化」されたのか。やはり 2022 年 2 月のロシア によるウクライナ侵攻が契機であろう。この問題に対し、**国連安保理はまったく機能しなかった**。そこで **G7 が中心になって対ロ制裁を決定した**。ただし経済制裁には、かならず しも多くの国は参加してくれなかった。

それは自国の経済にとって不利益になるからというのみならず、まずは先進国(North もしくは West)に対する感情的な反発があり、逆にロシアや中国(East)からは何がしかの利益が得られる可能性があった。そういう国々が"South"を自称し始めて、<u>結果として世界</u>は三極に分かれつつある、と考えればいいのではないか。

以下の図は、2022 年 6 月 27 日の日本経済新聞「そして 3 極に割れた世界 協調嫌がる 『中立パワー』台頭」 (秋田浩之コメンテーター) に掲載されていたものである。国の数 からいえば「反ロシア」の国が多数になるが、人口別にみると「反ロシア」は「親ロシア」 とほぼ拮抗しているように見える。当時としてはショッキングなデータであった。

### ロシアのウクライナ侵略をめぐる世界の対応は割れる



実も蓋もない言い方をしてしまうと、グローバルサウスとは(古い言葉だが)「アンチ巨人」のような存在なのではないか。 単純に米国主導、西側先進国主導の世界秩序が嫌われている、と考える方がわかりやすいと思うのである。

### ●「新興国」には不満が溜まっていた

それというのも、たまたま先週、IMFが最新版 WEO (世界経済見通し)を公表した。それを見ていて、「なるほどこれは新興国に不満がたまるはずだ」と感じたからである。

# ○世界経済見通し(IMF、10月 10日) "Navigating Global Divergence"

GDP 成長率	2021年	2022年	2023年	2024年
全世界	6.2%	3.5%	3.0% (+0.2)	2.9% (-0.1)
米国	5.9%	2.1%	2.1% (+0.3)	1.5% (+0.5)
ユーロ圏	5.3%	3.3%	0.7% (-0.2)	1.2% (-0.3)
日本	2.2%	1.0%	2.0% (+0.6)	1.0% (0.0)
中国	8.4%	3.0%	5.0% (-0.2)	4.2% (-0.3)
インド	9.1%	7.2%	6.3% (+0.2)	6.3% (0.0)
ブラジル	4.9%	2.9%	3.1% (+1.0)	1.5% (+0.3)
ロシア	5.6%	-2.1%	2.2% (+0.7)	1.1% (-0.2)
世界貿易量	10.7%	5.1%	0.9% (-1.1)	3.5% (-0.2)
原油	65.8%	39.2%	-16.5% (+4.2)	-0.7% (+5.5)
物価(先進国)	3.1%	7.3%	4.6% (-0.1)	3.0% (+0.2)
物価(新興国)	5.9%	9.8%	8.5% (+0.2)	7.8% (+1.0)

今回の WEO では前回 7 月バージョンに比べ、「米国の上方修正と中国の下方修正」が 目を引く。先進国経済は既に底打ちした気配があり、それはコロナ下で打ち出された大規 模な財政・金融政策のお陰である。ところがその過程で 40 年ぶりのインフレが発生し、欧 米の中央銀行は厳しい金融引き締めによって対応している。

その結果、先進国のインフレはおそらく来年には収まるだろう。ところが需要の強い新興国では、来年になっても 7%超のインフレが続く見込みである。彼らにとって辛いのは、なんといっても世界的なドル高である。ドルの長期金利(10 年物国債利回り)は今週は5%に接近しており、これではドルの独歩高は避けられない。そうなると新興国は、官民ともにドルでの借り入れが多いから、債務返済の負担が増えるのみならず、まずは自国通貨の防衛を急がなければならない。

ウクライナ戦争に伴う原油価格の上昇や食糧不足は、これも国によって多少の違いはあるとはいえ、多くの国にとっては負担増である。

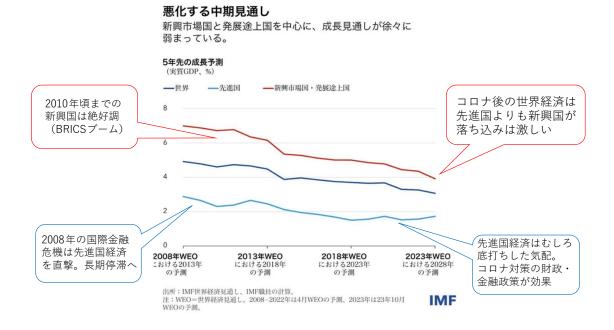
そしてそれ以前に彼らには、先進国に対して含む事情には事欠かないのである。

- \* 気候変動問題などで「上から目線」の説教が多い。
- \* その割に支援で回ってくるカネは以前に比べて少ない。
- \* mRNA 方式のワクチンは、新興国にはほとんど回ってこなかった。

#### ●途上国→エマージング→グローバルサウス

今回の WEO では、チーフエコノミストであるピエール=オリビエ・グランシャールが ブログで経済分析を行っていて、しかもそれが和訳されているのでありがたい¹。

特に下記のグラフは、なかなかのスグレモノではないかと思う(吹き出しの中の記述は本誌によるもの)



ちょうど 2008 年当時、先進国はリーマンショック後の金融危機により自信喪失気味であった。ところが当時の新興国経済はなおも「BRICS ブーム」で、好調さが持続していた。その年の 11 月にはワシントンで第 1 回の G20 が発足し、「もはや G7/8 の時代ではない」ことが印象付けられた。逆に中国は 4 兆元の景気対策を打ちだし、そのお陰で世界経済の底割れが回避された、とまで言われたものである。

上のグラフで <u>5 年後の成長見通しを比較すると、2008 年前後は先進国と新興国には実に</u> <u>2 倍以上の差がついていた</u>。これではもう途上国(Developing Countries)ではなく新興国(Emerging Countries)である。そして 2010 年前後には、全世界の名目 GDP における先進国と新興国の比率が逆転する。

ただし 2013 年頃からは新興国の成長見通しが低下し、コロナ下ではそれがさらに加速してしまう。逆に先進国は、コロナ下で経済が底打ちしたように見える。**両者の成長格差は、最近は縮小に向かっている**ように見える。

 $<sup>{}^{1}\</sup>underline{\text{https://www.imf.org/ja/Blogs/Articles/2023/10/10/resilient-global-economy-still-limping-along-with-growing-divergences}}$ 

新興国経済の快進撃は、2014年前後から勢いを失っていく。ひとつには FRB の「テーパリング」により、新興国への資金の流れが弱まったからである。アルゼンチンなどでは通貨危機が発生した。今回も同様だが、米国が金融引き締めを行うとたちどころに新興国経済に響いてしまう。ただし米国の政策は、その辺のことをまったく斟酌しないのである。

ロシアでは 2014 年にソチ五輪と「クリミア併合」があり、経済制裁を受けるようになる。 あるいは中国は、国内景気下支えのために 2015 年夏に人民元切り下げを実施している。

新興国経済の中で、<u>例外となったのがインドである</u>。2014 年には現在のモディ政権が発足し、さまざまな経済改革に着手して高度成長を維持していく。そのモディ首相は今年のG20で存在感を示し、来年春の総選挙では3期目を目指す予定である。

# ●第3回「一帯一路」フォーラムで浮かび上がったこと

今週 17-18 日には、北京で第 3 回「一帯一路」フォーラムが行われ、世界から 20 カ国程度の首脳が出席した。

習近平氏による構想発表から今年で 10 年、前回の 2019 年のフォーラムに比べると出席者は半減し、「債務の罠」問題などさまざまな批判も受けている。「人民元を地域の基軸通貨にする」「中央アジアとパイプラインで結ぶ」といった当初の大風呂敷は影を潜め、習近平氏もやや低姿勢になっているように見える。

中国が「南の国々」に対して経済的影響力を誇示する場としては、<u>今回の「一帯一路」</u> フォーラムはいまひとつ「有難み」に欠けた、と言えるだろう。中国経済は多くの問題を 抱えていて、今回の WEO でも「中国における消費者信頼感の低下と投資の低迷が、世界 経済にとって大きなリスクとなる」ことが指摘されている。

しかしながら、習近平氏と訪中したプーチン大統領にとっては、**文字通り笑いが止まら ないタイミング**となったのではなかったか。中ロ両国は連携強化を確認するとともに、米 欧に対抗する意向を強くしたに違いない。

それというのも、同日にはバイデン大統領がイスラエルに乗り込んでいた。10月7日に ハマスによるイスラエル攻撃があり、1年後に選挙を控えた米大統領としては、何はさて おきここは駆けつけなければならない立場である。

しかし不運なことに、バイデン氏が到着した日にガザ地区の病院が爆破され、大きな被害を出したという間の悪さであった。中東はもちろんのこと、全世界のイスラム圏、さらには「グローバルサウス」の国々の眼にはどう映ったことか。

中口首脳としては、こんな風に言えるのである。

「米国はいつもあんな感じだ。『ルールに基づく』国際秩序を」などと言いながら、いざとなったら無条件でイスラエルの肩を持つ」

これでは南の国々の中で、<u>「アンチ米国」が増えるのは自明であろう</u>。そしていつものことながら、米国はそのことに対する自覚がサッパリ乏しいのである。

## <海外報道ウォッチ>

イスラエルとパレスチナをめぐる最新情勢

(観察対象: The Economist)

10月7日に武装勢力ハマスによる残虐なイスラエル攻撃が行われてから、間もなく2週間になる。時々刻々と状況が変わる中で、いったい何を信じればいいのか。以下、The Economist電子版が伝える米国、ロシア、アラブ世界の最新情勢を紹介しておこう。

まずは米国の動きから。10月18日にバイデン大統領が現地に乗り込んだが、途端にガザの病院が爆破され、アラブ指導者たちには会ってももらえない始末。しかし同誌の米国政治コラム Lexington は、バイデンの対イスラエル外交の歴史を伝えてくれている。"Joe Biden has shown a steady hand in the Gaza crisis"(ガザ危機でバイデンが発揮した手腕)<sup>2</sup>。

- \* ジョー・バイデンは短気だが、<u>ときに並外れた忍耐力と寛容さを発揮する</u>。2010 年の 副大統領時代にネタニヤフ首相から酷い仕打ちを受けた。しかし彼とは 1980 年代の大 使館勤務時代からの付き合いで、「君の意見に賛成できないが愛している」と言う。
- \* トランプはネタニヤフがバイデン当選を祝ったことが今も許せず、議会共和党は空転 を続けている。しかしバイデンにはシナリオがある。2021 年のハマス攻撃の際には空 爆を主張するネタニヤフに、4度目の電話で「もう逃げ場はないぞ」と引導を渡した。
- \* <u>米民主党は独自の分裂を抱えている</u>。左派の一部はイスラエル市民の虐殺を祝福し、 一部議員は即座停戦を求める。しかるにそれは政治的、戦略的、道徳的に不可能だ。
- \* もちろんこれからが大変だ。ガザ侵攻は更なる苦しみを生み、戦争拡大の恐れもある。危機が緩和されれば、ネタニヤフは諜報と作戦失敗の責任を問われよう。ガザの選挙でハマスが勝利した頃から、**※4代の政権はあまりにもパレスチナに注意を払ってこなかった**。「イスラエルの真の友」なら、そんなことはなかったはずなのだが。

バイデンが苦労している時に、プーチン大統領は北京の「一帯一路フォーラム」に乗り込み、習近平主席と3時間も話し込んだ。**ロシアが今回の襲撃でハマスを直接支援した事** 実はないらしいが、両首脳にとって今回の事態はそれこそ「天の配剤」であろう。

以下は、"The view from the Kremlin" (クレムリンからの風景) いう解説記事から3。

- \* 中東をめぐる<u>ロシア外交が活発化している</u>。プーチンは犠牲者に哀悼の意を表したが、ハマスを非難することはしない。この危機は米国のせいだと非難する。ロシアはイスラエルと距離を置き、西側の関心を逸らす好機だと捉えているからだろう。
- \* ネタニヤフはプーチンを親愛なる友人と呼び、何十回もロシアを訪問している。隣国

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> https://www.economist.com/united-states/2023/10/18/joe-biden-has-shown-a-steady-hand-in-the-gaza-crisis

<sup>&</sup>lt;sup>3</sup> https://www.economist.com/briefing/2023/10/17/putins-plan-to-profit-from-the-israel-hamas-war

<u>シリアでの国益追求のため</u>であり、プーチンのような強者に対する親近感もある。だからロシア非難を避け、求められてもウクライナへの武器供給はしないのだ。

- \* しかしロシアのパレスチナ支援は、1973 年以来揺らいでいない。**イランとも関係を強 化してきた**。ロシアはウクライナ攻撃用にイランから自爆ドローンの提供を受けてい る。見返りとなる攻撃用へリと防空システムは、対イスラエル戦に使われかねない。
- \* イスラエルとハマスの戦争が拡大すれば、ロシアとイランは石油やガスの値段が高騰 し、米国の中東政策が混乱するという利益がもたらされる。中国も同様に考えてい て、中東情勢の泥沼化と米国の権威失墜を歓迎するだろう。

それでは最後にアラブの国々はどうなのか。**"The Arab world thinks differently about this war"**(アラブ世界はこの戦争を違う見方で捉えている) <sup>4</sup>をご紹介する。

- \* 「アラブ世界」は一般化しにくい。数千キロの20カ国近くに4億5000万人の人々が住んでいる。<a href="tel:465000万人の人々が住人でいる"はとんどのアラブ人は、パレスチナの大義に共感している"と言っていい。" またんどのアラブ人は、パレスチナの大義に共感している。</a>
- \* ただし過去の紛争と比較すると、いくつかの相違点がある。第 1 に 2020 年以降、UAE など 4 か国がイスラエルと国交を結んでいる(かつてはエジプトとヨルダンだけだった)。サウジも現在進行形で、<u>現地メディアの扱いも変わってきた</u>。アルジャジーラはハマス寄りだが、サウジや UAE では「占領軍」ではなく「イスラエル軍」と呼ぶ。
- \* 第2に彼らは紛争拡大を恐れている。エジプトはガザとの国境開放を嫌う。「1億人の エジプト人を危険にさらせと言うのか?」とTV司会者は言う。レバノンも同様だ。
- \* 第3に彼らは、<u>イランの支援を得ているハマスを好まない</u>。特にシリア人は、イランやヒズボラは弱体化してほしいのだ。アラブの高官たちはオフレコではハマスやガザを嫌うが、公の場で口にする勇気はない。一般国民との間には断絶がある。
- \* ブリンケン国務長官は、サウジの MBS 皇太子に何時間も待たされた。エジプトのシシ 大統領からは、パレスチナ人の苦境についての講釈を延々と聞かされた。バイデン大 統領はそんな歓迎すら受けず、首脳との会談は一方的にキャンセルされた。
- \* 今回の事態は、1973 年の第 4 次中東戦争といくつもの類似点がある。半世紀前のイスラエルは文字通り存亡の危機に立たされた。そして今、アラブ諸国は神経質な傍観者に過ぎない。指導者たちは、戦争で自国の脆い体制が不安定化することを恐れている。イスラエルに倒れてもらっては困る、と感じている指導者もいるだろう。

近年のアラブ世界では、過去の対立や過激なイスラム主義と一線を引き、<u>大胆に経済重視に舵を切る「新中東」が広がり</u>を見せていた。アブラハム合意、サウジとイランの国交正常化、「新経済回廊」の構築などである。今回のパレスチナの事件は、アラブ世界を一気に「先祖返り」させたように見える。ただし、再び昔には戻れない面もありそうだ。

\_

<sup>4</sup> https://www.economist.com/briefing/2023/10/18/the-arab-world-thinks-differently-about-this-war

## <From the Editor> 10月の決戦

10月11日夜、藤井聡太竜王・名人が永瀬拓矢王座を破り、前人未到の「八冠」に輝きました。実はその夜は六本木で中華料理をいただきつつ、日本将棋連盟アプリでちょいちょい棋譜を覗いては、「今日は永瀬王座の勝ちだなあ~」と思っておりました。

夜半になって 122 手目、藤井竜王・名人が△5五銀と打った時点で、AI 評価値は 100% 対ゼロで永瀬王座が優勢。そこで▲4二金と攻めていれば勝ちだったのに、秒読みに追われて▲5三馬と指したところ、その瞬間に評価値は 2%対 98%に逆転していました。長いこと将棋を見てきて、これだけ酷な逆転劇はそうそうあるものではありません。

しかるにこれまでタイトル戦で負けなしの藤井七冠、改め八冠のこれまでの戦績を考えれば、今回の王座戦はもっとも苦しんだ勝負であったのではないか。何しろ VS と呼ばれる 2人だけの研究会を重ねて、互いの手の内を知り尽くした同士の決戦でしたから。

今後は、「藤井八冠から誰が最初にタイトルを奪うのか」が将棋界の関心事となるでしょう。その最短距離に居るのは、やはり永瀬拓矢前王座でありましょう。なにしろこの世界は「敗局は師なり」でありまして、今回は思い切り悔しい負け方をしたのですから。

そして先週末はラグビーW 杯の準々決勝でした。4 つのカードは「珍しいことに、全部 北半球が勝ち残るのではないか」という前評判でしたが、意外や意外、イングランドしか 残りませんでした。地元フランスは、南アを相手に壮絶な戦いを挑むもあと一歩届かず。 相当に強いはずのアイルランドは、王国復活のニュージーランド前に敗れ去りました。そ してアルゼンチンがウェールズを突き放す。あれあれ、最後に残った 4 チームにイングラ ンドとアルゼンチンが居るということは、日本代表が入っていたのは無茶苦茶キツイ枠だ ったのではありますまいか。

そして今週末は準決勝。アルゼンチン対 NZ、そして南ア対イングランド。この世界では、 やっぱり「サウス」が強い。こうなったら個人的には、オールブラックスを応援したいで す。開幕戦でフランスに敗れたときには、愕然としましたけどねえ。

そして今週は、クライマックスシリーズの最終ステージ。セ・リーグでは阪神タイガースがやっぱり強いです。昨晩の木浪選手のサヨナラヒットには大いに留飲を下げました。 今宵で決めてほしいです。パ・リーグは混戦。戦力ではオリックスが上だとは思うのですが、クライマックスシリーズのロッテはしぶといですからなあ。

今月はいろんなことが続いて、中東情勢から米国の長期金利、補正予算の行方まで多くのことを気にしなければならない。一方で、将棋やスポーツでも多くのサプライズがある。まだまだ番狂わせがありそうな予感と共に、これから10月下旬を迎えます。。

\* 次号はイレギュラーになりますが、11 月 7 日 (火) にお届けいたします。紛らわしく なりますことをお詫び申し上げます。

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記あてにお願します。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル http://www.sojitz-soken.com/ 双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: <a href="mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com">yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com</a>